

〈原著論文〉

吉見静江が1920年代の米国でみた セツルメントの理論と実践に関する史的考察

——「ために、ではなく、ともに」の源流——

田 澤 薫

抄 録

吉見静江は、ニューヨーク社会事業学校で学んだ後に興望館セツルメントにて20年近く保育事業や学齢期児童指導等に取り組み、児童福祉法成立と同時に厚生省児童局に新設された保育課の課長となった人物である。以来12年間、日本の保育所および児童厚生施設の詳細は吉見課長の下で取り組まれた。本稿は、吉見の留学に着目し、間接資料を通してその実態にできる限り迫ろうとした。留学での学びが、興望館セツルメント業務のみならずその後の課長業務の基盤ともなる吉見の価値形成に関わった可能性を踏まえ、「社会事業とその経営法を学んだ」と伝えられるばかりで未詳であった留学の内容整理は必然と考える。その結果、グリニッチハウスでの体験とそこから得た印象の一部が明らかにされた。

キーワード：吉見静江，興望館セツルメント，グリニッチ・ハウス，保育所，児童福祉法

序章

第1節 問題の所在と関心

東京都墨田区京島に本部を置き、保育所および児童厚生施設、児童養護施設の経営に従事する社会福祉法人興望館の1919年に始まる百年にわたる歴史は、児童福祉法下における保育所および児童厚生施設行政の具体化との関わりにおいて、一度検討しておいた方がよいものと考えられる。その理由は、前身である興望館セツルメント（以下、興望館）が「創立の時代」（興望館創立75周年記念誌編纂委員会1995:13）とよばれる本所松倉町での最初の10年を経て現在地に移転した後、「定着の時代」（興望館創立75周年記念誌編纂委員会1995:35）にあたる1929年から19年間にわたり主任や館長として主務を担った吉見静江（1897-1972）が、児童福祉法成立と同時に厚生省児童局に新設された保育課の課長と転じ、以来退官までの12年間を保育所および児童厚生施設の所轄

課長であったためである。児童福祉法で新たに設けられた保育所と児童厚生施設に関する分掌は、保育課が担った。課長一人の知見と経験則で行政が動くわけではない。しかし、12年間という長い課長在任期間と、その間に制度の礎が築かれた時代の特性を考えると、入職前の知見と経験則とが入職後の課長業務と無関係であったとは考えにくい。その視座に立ち、筆者は2017年から、吉見静江を軸に興望館の保育を検討しながら児童福祉法成立期の保育所保育を検証している⁽¹⁾。本稿では、吉見が興望館で主任に就任する以前の2年間を興望館での仕事の準備としてニューヨークに学んだことに着目し、吉見が留学先でセツルメント理論と実践に関して観て学んだ内容を少しでも明らかにしたい。

第2節 吉見静江と興望館セツルメント

吉見静江は、日本女子大学の英文科を卒業して女学校の英語教師を務めた後、外国人宣教師に日本語を教える職に就いた。そこで得た信頼のもとに、婦人矯風会外国人部の要請で興望館に奉職する準備としてニューヨーク社会事業学校に2年間の留学をした⁽²⁾。

興望館は、キリスト教主義による私設の団体であり、近代社会の成立に伴う人口流入で形成された東京の本所で住民のニーズに呼応しながら活動を展開してきた。その興望館から第2次大戦後の児童福祉行政へ継承された理念や事項を時代的制約に留意しつつ検証できれば、時代を超えた日本社会における保育や子育て支援の本質が明晰化されると期待できる。その前段として、そもそも興望館の事業と活動の源流がどこにあるのかを探ることが望まれる。

興望館の歴史を伝える資料においても、帰国した吉見静江が興望館に着任した年度から地域社会の特性を見据えて次々と新事業を展開していった様子が紹介されている。しかし、それが吉見個人の創意によるのかモデルがあったのかについては未詳であり、今後の研究が待たれる。

第3節 先行研究の検討と本稿の目的

興望館については、すでに、社会福祉法人興望館において多くの研究の蓄積がある。興望館は第二次大戦末期には業務文書を夏季キャンプや転住保育に用いた長野県軽井沢の施設に移しており、そのお蔭で戦災を免れた第一次資料が多く現存している。それらを用いて社会福祉法人興望館が編纂し発行したものだけでも、『興望館セツルメント七五年の歴史』（興望館創立75周年記念誌編纂委員会1995）、『興望館セツルメントと吉見静江 その実践活動と時代背景』（瀬川2000）、『北米・カナダ諸教会派遣 婦人宣教師達の足跡1935～1940 付 戦前期児童保護関係資料』（瀬川2004）、『激動のなかで 混乱期に於ける日本人理事による理事会記録 昭和16年4月～昭和27年3月』（瀬川2007）、『興望館100周年記念誌—希望への扉』（興望館2019）がある。これらは本研究の基礎文献である。

一方で、興望館に関する客観的な視点からの検討はまだ十分になされていないわけではない。その

中で、鈴木みな子が戦前期に東京で私的社會事業の実績を持ち戦後に社会福祉法人となった施設の比較検討で興望館を取り上げた研究(鈴木2003)は、私的社會事業としての創設理念や実践理念と、戦後の社会福祉制度確立の中で民間社会福祉施設であっても公的な社会福祉システムの中に組み込まれることの意味を整理し、筆者の研究関心に照らして興望館から社会福祉法人興望館への変換を捉えるにあたり学ぶところが大きい。

また、吉見静江に関する人物研究の成果は、評伝としてまとめられたものに、塚本しう子著「吉見静江」(塚本1983)、瀬川和雄著『吉見静江 シリーズ福祉に生きる』(瀬川2001)がある。とくに後者は、学生ボランティアとして吉見館長時代の興望館に関わった後に職員となり、また後年は厚生省職員として吉見課長の下で働いた経験を持つ社会福祉法人興望館理事であった瀬川和雄の筆による。研究書ではなく読み物であるため典拠資料の挙示がなく、研究資料として用いることができないが、長年にわたり指導を受けながら活動を共にした著者でしか書けない貴重な参考資料に位置づく。

しかしながらいずれの成果も、戦後の保育所および児童厚生施設への連続性に関する課題認識からの検討ではない。とりわけ、興望館における実践理念や方法論の源流については、社会福祉法人興望館による刊行物においても、瀬川の単著においても、また吉見自身の著作物でも、ほとんど触れられておらず具体的な資料提示もない。つまり、吉見の1927年から2年にわたる留学については、興望館の仕事を担当準備として赴いたということが定説になっているが、実際のところ何を学んできたのかは後の者の眼には明らかにされていない。

吉見静江は、1927年秋の新学期から1929年夏までをニューヨーク社会事業学校に学んだ。本研究ではそこに焦点を絞り、資料から、この留学で吉見が得た学びの一部を整理する。

第1章 研究方法

この研究は文献を用いた検討である。吉見静江の留学時代の日記や持ち帰った資料等は見つかっていない⁽³⁾。その事情を踏まえ、本稿では以下の4点を検討対象とする。

第1に、吉見静江著「アメリカの社会事業」(『第3巻 社会』⁽⁴⁾1947所収)である。吉見が学んだニューヨーク社会事業学校は後にコロンビア大学社会福祉学科となるが、「アメリカの社会事業」は、日本におけるコロンビア大学同窓会が1947年にアメリカ研究叢書を刊行した中に、吉見が寄稿した論文である。刊行当時は第2次大戦後の被占領期であった。『第3巻 社会』への掲載論文は5編、「アメリカの家庭生活」「アメリカの婦人」「アメリカの礼儀作法」「アメリカ人気質」と留学経験者としての見聞録が続く中で、吉見の担当章は異色である。吉見論文は前半と後半に分かれ、前半では1935年にアメリカで成立した社会保障法の解説に多くの紙幅を割いている。「最近我が国に於て、生活保護法が実施されやうとしている」と記され、留学時期ではなく、連合国総司令部か

ら資料を得て書き下ろされた同時代のアメリカ社会保障制度の解説である。後半は「文化教育的社会事業」として、吉見の見聞が印象と共に記されている。「アメリカには盛なる文化教育的社会事業の面が残されている」(吉見 1947:205)と書き起こしてその例として詳説しているのが、「グリニッチハウス (セツルメント)」⁽⁵⁾と見出しが付された項である。

第2に、吉見の留学時期のニューヨーク社会事業学校に関する情報を得る手段として、後身であるコロンビア大学社会福祉学部の記念刊行物である Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. ed. (2001) *The Columbia University School of Social Work*. (Columbia University Press) を活用する。

第3に、吉見が訪問した時期のグリニッチハウスに関する情報を得る手段として、丁度 1927 年に創立 25 周年を迎えた同セツルメントが刊行した記念誌である Greenwich House (n.d.) *TWENTY-FIVE YEARS OF GREENWICH HOUSE*.⁽⁶⁾ と、創設者であるメアリ・キングスベリ・シンホヴィッチの自伝 (Simkhovitch, M. K., (1938) *Neighborhood; my Story of Greenwich House*. W. W. Norton & Company) である。

第4に、大阪市社会部が 1936 年に刊行した資料である『紐育に於けるセツルメント』(大阪市社会部庶務課)が挙げられる。これは、ニューヨーク市福利委員会調査局がセツルメント連盟と協力して 1927 年から 1928 年に同市のセツルメントに対して行った調査の結果をもとに、コロンビア大学の研究者たちが編集し 1935 年に刊行した報告書『*Social Settlement in New York City*』を大阪市社会部が抄訳した冊子である⁽⁷⁾。調査時期が吉見の留学時期に重なる。本書の情報は、ニューヨークのセツルメント一般の調査データであってグリニッチハウスの個別性が反映されているものではない。しかし、吉見が滞在した時期におけるニューヨーク市のセツルメントの状況を、凡そ理解することが出来るだろう。

なお本文中に引用した資料は、旧漢字、旧仮名遣いを現行用法に改めた。また、Greenwich House の日本語表記は文献内における吉見の用例にならない「グリニッチハウス」とする。

第2章 1920年代ニューヨークでの学び

第1節 吉見静江の留学

吉見静江の留学は、興望館の 20 周年に編まれた冊子「Door of Hope (希望の扉)」⁽⁸⁾における「1925 年」の「管理者」の項に「3 年間、理事会は徹底的に訓練された管理者が事業の責任者になる必要を感じてきた。3 月の会合で、理事会のメンバーで、いつも出席不可能だったミス・イーディス・ヘルマーが、ミス吉見静江が最も期待できる若い婦人であり、ニューヨーク YWCA 社会福祉訓練校マで 2 年間教育をうけたあと事業を任せられると推薦した。その教育にかかる費用調達につき詳細を算出する委員会が任命された。フレンド奉仕団から月 50 ドル、ミセス・ライシャワーとミセス・ウラルサーそれぞれの友達から月 50 ドル支払われることになった。吉見さんは 9 月 18 日に

出航した」と記されている。興望館は、「日本における布教活動（伝道）、又は学校教育・社会事業等のために派遣された婦人宣教師のうち、来日以降に於いて、日本キリスト教婦人矯風会の会員となり、外人部を組織していた」うちの「有志がボランティア活動として委員会を組織して」運営されていた（瀬川 2004：143-147）。そのため、「母国の教会、教派からは興望館の運営費は送金されなかった」ばかりか、委員たちは「母国の教会、日本への派遣先団体との関連で専任者となることが出来なかった」（瀬川 2004：143-147）。そこで、「専門的知識を持つ日本婦人を管理者を始め各部門に配置すること」が必要となり（瀬川 2004：143-147）、吉見の以前にも数人の日本人女性が、それぞれ短期間ずつ主任を務めた。

留学は吉見にとって、二つの難題があったと推察される。第1に、留学先であるニューヨーク社会事業学校が、「すでに社会事業に従事した経験を持つ者が再訓練を受ける機関であった」（瀬川 2001：34）ことである。吉見は日本女子大学の英文科を卒業し、それまでに就いた仕事はいずれも英語を用いた教育職であった。社会事業の経験も知識も持たない吉見に困難がなかったはずはない。第2に、吉見には間もなく学齢を迎える幼児がおり、この幼児を親族に預けての渡米であった。つまり、帰国後の興望館の仕事と小学校に就学したばかりの子どもとの生活を両立し得るのか、どう両立させるのかは、吉見個人が抱えたもう一つの課題であった。

吉見の留学が具体的にどのような内容を含んでいたか、どのようなことを学んだかは、これまでの公刊物にはほとんど記されていない。後年、長きにわたって吉見のもとで業務に就いた瀬川和雄による「静江は二年間にわたって社会事業とその経営法を学んだ」（瀬川 2001：36）という一文だけが、現在の手掛かりである。

第2節 ニューヨーク社会事業学校

1898年にニューヨーク慈善組合協会によって開かれた6週間の夏期セミナーが、ニューヨーク社会事業学校の嚆矢だという。その後年間を通して授業が開講されるようになり、1917年には校名をニューヨーク社会事業学校と改めた。学生は初年度から一貫して女性が多く、記録がある中で吉見が留学した年度に近い「1925-26」年の全登録学生は364名、うち女性は228名、次に統計が残されている「1930-31」年になると全登録学生は671名、女性が576名を占める（Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 68-69）。一方で、「すでに社会事業に従事した経験を持つ者が再訓練を受ける機関」として当然ながら、特定の科目のみを選んで履修している学生が多く、全登録学生のうち既定の単位数以上に履修登録している「フルタイム学生」は、年度によるばらつきはあるものの概ね3割程度である。また、学位取得者は非常に少ない。吉見の留学年にあたる「1928-29」の統計によれば修了者はわずか12名、全員が女性である（Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 68-69）。

「1923-1924年」の記録によれば、「社会事業の主要な五領域」として、ソーシャル・ケースワーク、

産業、社会調査、コミュニティ組織、犯罪学を専攻する5学科が設けられていた (Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 21)。また、教場と現場とが共にソーシャルワークの理論と実践の学びの場であるという考えのもとに、修学期間の半分は社会福祉実践演習で費やされたという。さらに、初年次の第3クォーター終了時までには、学生は「主たる社会福祉現場」を選択することになっており、2年次の社会福祉実践演習とゼミがこの選択に基づいて構成された。その選択肢は以下の16種類、家族ケースワーク、児童の措置、施設スーパービジョン、少年矯正、訪問指導、医療ソーシャルワーク、精神ソーシャルワーク、更生保護、保護観察、社会組織、農村組合、レクリエーション組合、社会調査、統計、人事管理、工場検査である⁽⁹⁾。

1923年の記録では、2年制コースの学生は175名、実践演習先は45か所、専任教員数は28名だった (Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 92)。在籍料10ドルの他に、2年制では350ドルの学費が必要だったという。1920年から1926年にかけて3名の日本人留学生を含む65名の留学生がおり、ソーシャルワークの専門性が認められつつあった時代にあってその先駆的存在として学校が位置づいていたという振り返りがなされている。(Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 93)。中国、フランス、ドイツなど英語圏でない国からの留学も少なくない。1927年にはカリキュラムの全面的な見直しが行われ、「ソーシャルワークの基本技術」「人としての経験による科学的要因と定式」「ソーシャルワーク実践」「ソーシャルワーカーへの方向付け」の四つの柱に沿って組みなおされると共に、ソーシャルワーク実践演習をさらに強化するための「フィールドワーク部」が設立され、実習先と学生と結び、支援する働きを担うようになったという (Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 94)。学園史の中でもこの時代は「進歩と成熟の時代」と称される。吉見が留学中だった1929年3月には250人の卒業生の参加を得て「第1回卒業生会議」が開催され、まさに「なぜソーシャルワークには養成が必要なのか」が議論された。

同年10月には大恐慌が起こった。その直前、現場実習を含む実践教育を軸とするソーシャルワークの学校が確立していく時期に、吉見はニューヨークで社会的組織—その一例としてのセツルメント—の最先端の理論と実践に触れる学修環境に身を置いていたといえるだろう。そして、吉見はグリニッチハウスを訪れ、吉見の言によれば「幾日か生活を共にした」という (吉見 1947: 209)。

第3節 セツルメント「グリニッチハウス」

○「グリニッチハウス」

『第3巻 社会』に収められた吉見論文「アメリカの社会事業」の「グリニッチハウス (セツルメント)」の項にある「嘗て筆者がこゝに幾日か生活を共にした当時」(吉見 1947: 209) という表現から、ニューヨーク市のグリニッチハウス (Greenwich House) に関するこの記述は、吉見が留学中に得た知見に基づくと読める。グリニッチハウスでの滞在等を示す直接的資料は見つかっていないが、上記の理解に立ち、ここでは、吉見の留学時期のグリニッチハウスの実態に迫ることで、

吉見の留学中のセツルメント理解を推察する手掛かりとしたい。

グリニッチハウスは、1902年にメアリ・キングスベリ・シンホヴィッチ (Mary Kingsbury Simkhovitch 1867～1951) が中心となって、ニューヨーク市のダウタウンの一画であるグリニッチ・ビレッジに開設されたセツルメントである。グリニッチ・ビレッジは、当時、「画描きや、小説家や詩人が好んで住み、又イタリイ訛りやいろいろの訛のある移民の住居も沢山あるところ」(吉見1947:206)であり、宗教も、民族も、職業も、経済的な状況も、やりたいこともそれぞれに異なる人たちが集まっている地域であった。その中で、家族の状況を踏まえた一人一人で異なる関わりを直接に持ちながら、仲間意識や相互支援を広げてきたのがグリニッチハウスだという。

グリニッチハウスでは、その年度の事業計画は近所に住む人たちの関心事や要望で決まる。それも、日常的に関わったり直接話したりする中で気付いて事業に盛り込まれる。例えば、遊んだり粘土や雪で形を作ったりする子どもの興味関心への気付きから、造形や陶芸の活動が立ち上がる (Simkhovitch, M. K. 1938: 250)。こうして1906年に音楽教室が始まり、1916年には「こども福祉クリニック」が始まり、劇場や陶芸工房もよく知られるようになり、1921年から保育園が開設された。1929年にはコロンビア大学と提携して長期の社会福祉実践演習を始めたという⁽¹⁰⁾。これは吉見の留学の最終年度にあたる。

当時のグリニッチハウスは、どのような場所だったのだろうか。

まず、『紐育に於けるセツルメント』(大阪市社会部1936年)を手掛かりとして、当時のニューヨーク市におけるセツルメントの概要を押さえておきたい。セツルメントで働く人々は、「館長」「其の他の職員」「訓練中の学生」「篤志共働者」「レジデント(居住職員)」から構成される。館長については、「主としてセツルメントの実際の運営に責任を有する」「館長は館の規模の大小に拘らず仕事は非常に多忙であって、職員を選任し、新しい従事員に仕事を与へ、各部門の連絡を計り、常務委員会・評議員会・篤志従事員等に接触してこれを操作し、他の社会事業団体・文化団体と連携し、新財源を開拓し、理事・職員・一般公衆に地区の緊要性を解明し、その会合の方法を計画するなどのいろいろの仕事がある」(大阪市社会部1936:48)と具体的な業務内容が列記されている。主任については、「自らは専門家の資格は一つも持っていないが、適当な専任の職員を選んで指揮しなければならない」と業務の本質を衝き、「主任は専門職員が餘り関心を持たない行政上の細微の点や館の規則・伝統に就いても注意しなければならない」「ヨロヅ屋でなければならない」(大阪市社会部1936:49-50)と、セツルメントの主任と専門職員を比較しながら整理されている⁽¹¹⁾。「主任の数多の仕事の内には比較的閑却され易いものがある。その最も主なるものは、事業計画を定期的に検閲することである。(中略:筆者)地区居住の民族が変り、年齢階級に異動を生ずるなどの重要な変化が生じたことを知っていても、それによって各部の事業が如何に影響を受けたか、また如何なる修正を加へるべきかについては普通餘り調査されていない」(大阪市社会部1936:50)と、地域社会と呼応関係で活動内容が決まっていくセツルメントならではの、ニーズの汲み上げと事業計

画の見直しの重要性は主任の業務として特筆されている。

事業計画に関連して、ニューヨーク市の80セトルメントのうち74セトルメントがクラブを備え、その総数は1696にわたり、「セトルメントを特徴づける事業活動はなにか、といはれたならば先ずクラブが挙げられる」状態であったと記されている⁽¹²⁾ (大阪市社会部 1936: 9)。

「訓練中の学生」については、「費用の高ばらぬ労力を獲るとともに、かたがた社会事業従事員の訓練に資するがために、45館の内23館は学生を従事員として利用している」とある (大阪市社会部 1936: 54)。学校名が列記される中には、「コロンビヤ大学」「紐育社会事業学校」が含まれる。セトルメントで補助的役割を果たす学生の人数は、「1927-28年に、23館に182人の学生の助手が居り、その中142人はセトルメントに居住しないものであった。調査時には21館に一人の学生助手もいなかった」 (大阪市社会部 1936: 54) と記され、1館辺りに10人に近い人数の学生が関わっている場合があることや、居住を伴う学生は40名と決して少ない人数ではないが一般的なわけでもないことがわかる。もともとニューヨーク市内の学校の学生であるから通いながら活動に参加する環境にあり、その上で居住するのは、住居を求める学生や積極的な実践課題を持つ学生が主であったということだろう。「学生のサービスを利用している23館の内19館では、単科大学・総合大学・専門学校などの申込に応じて、これらの学生をセトルメント主催の下に行はれる特殊事業に従事せしめている。そのセトルメントの中9館に於いては監督権は学校とセトルメントに分割されているが、6館に於いてはセトルメントのみに、4館に於いては学校のみにある」という記述もあり、学生受け入れの多くは、学生の個人的な申込によるのではなく、教育プログラムの一環として位置付けられている場合が多いようである。単位認定まで行うプログラムなのか、学校の理念に沿う体験が期待されているのかによっても、指導や評価の主体がセトルメントと学校のどちらに置かれるかが異なるだろう。ある主任職による自由記述として紹介されている「各部長が監督する外、職員及び部長の参観や会議によって監督する」 (大阪市社会部 1936: 55) 方法は、ソーシャルワーク養成のための社会福祉実践演習としてのセトルメント実習における望ましい指導例といえる。「グリーンニッチ館とコロンビヤ大学との関係に就いての調査報告 (1930年6月刊)」についても紹介されており、グリーンニッチハウスがソーシャルワーカーの養成校との連携に先鞭をつける存在であったことが窺われる (大阪市社会部 1936: 51-52)。

セトルメントの語源が「居付く settle」であるように、「80館の内56館はその職員の全部なり幾分と、ほかの関係者を宿泊させている」 (大阪市社会部 1936: 58) という。吉見がグリーンニッチハウスについて「職員、ヴォランティア (任意の奉仕者) 或は筆者の如き外国の学生等いろいろの人達が30余人、婦人は会館の中に、男子は近くの別館に泊」 (吉見 1947: 209) っていたと記す内容と一致する。ボランティアについては、「1年を通じて4館に1524人いた」 (大阪市社会部 1936: 56) とある。学生もボランティアもセトルメントに居住する場合は経費を収めるが、「多くのセトルメントは職員でないレジデントにさへ、居住に要する経費よりも少い居住料を課している。

で、これは彼のセツルメントへのサーヴィスが、居住に要する経費とその支払居住料との差額と同等もしくはそれ以上に値ひすとの仮定によるのである」(大阪市社会部 1936:58)と解説され、学生やボランティアは労力として期待されていたことがわかる。同時に、「セツルメントに於けるレジデントの地位は、彼等のセツルメントへの後援及び職業的社会的友交関係は別としても、彼等がその地区生活を楽しむといふ単なる事実及びそれがセツルメントに与へる色調は、ある主任の意見によるとセツルメントにとっての非常な利益であるといふ」(大阪市社会部 1936:58)という見解が紹介され、気持ちを据えてその地区に「居付く settle」人の存在自体に価値が置かれていた。

次に、ニューヨーク市のセツルメントの中でもグリニッチハウスに焦点を絞っていくこととする。

○グリニッチハウス館長メアリ・キングスベリ・シンホヴィッチ

グリニッチハウスを主宰するメアリ・キングスベリ・シンホヴィッチとは、どのような人物だったのだろうか。

アメリカ国立オンライン伝記⁽¹³⁾に「セツルメント館長と住宅改良家」と紹介されているように都市計画の領域と社会事業の領域の双方で知られているメアリ・キングスベリ・シンホヴィッチは、1867年に生まれた。吉見より30歳年長である。1890年にボストン大学を卒業したが、大学ではファイ・ベータ・カッパ⁽¹⁴⁾のメンバーになるほどの優秀な学生だった。在学中は、いくつかの社会事業団体でボランティア活動に勤しみ、卒業後は2年間、高校のラテン語教師を勤めた。1894年にラドクリフ大学で大学院に入り、翌年、ヨーロッパへの研究旅行中に経済学を学ぶロシアの学生であった、後に夫となるウラジーミル・シンホヴィッチ (Vladimir Gregorievitch Simkhovitch)に出会った。彼は、後に1904年から1942年まで、コロンビア大学で経済史の教授を務めた。

1902年に、シンホヴィッチは、グリニッチハウスと名付けたセツルメントハウスを設立した。その後もシンホヴィッチの仕事はセツルメント運営に留まらず、ニューヨーク市の賃貸住宅に関する行政の仕事、コロンビア大学での非常勤講師、多くの団体の委員等、幅広く数多くに及んだ。

住宅改良の領域で活躍が目覚ましいシンホヴィッチであったが、1911年にニューヨーク市の公共レクリエーション局の一員となり、1925年には、市レクリエーション委員会の議長を務めた。つまり、グリニッチハウスで主たる業務を担いつつ、行政の一員としても別の立場および別の視点から関連領域に取り組みながら、40歳代の日常を送ったことになる。1917年には、全米セツルメント大会で会長を務める⁽¹⁵⁾など、公共住宅とセツルメント事業において全米的な権威と認識されていたことがわかる。シンホヴィッチのセツルメント運動の精神は、「ために、ではなく、ともに (With, Not For)」に集約されると評される (B. L. Somon, 2001: 371)。

後年にまとめた自伝では、グリニッチハウスでの生活を振り返る中で「毎年毎年、日本、イタリア、フランス、ドイツ、インド、中国、メキシコ、エジプト、スカンジナビア諸国、ロシア、ニュージーランドから、訪問者や居住者が、アメリカの大都市の日常生活に直接触れることから学びたいと、私たちのところへやって来た」(Simkhovitch, M. K., 1938: 298)と書き残している。シンホヴィッ

チは、グリニッチハウスのレジデントが全米各地で多種多様な専門職になって活躍していると述べており (Greenwich House, n.d.), シンホヴィッチの側にもグリニッチハウスの精神を積極的に伝えたいという意思は強かったと考えられる。吉見の留学が始まった1927年、シンホヴィッチは60歳、グリニッチハウスは創設から25年を迎えていた。

第3章 吉見静江がグリニッチハウスで受けとったもの

これまで、「嘗て筆者がこゝに幾日か生活を共にした当時」(吉見1947:209)という言葉を手掛かりとして、吉見の留学期間である1927年から1929年における、ニューヨーク社会事業学校とグリニッチハウスについて整理してきた。ここで、吉見静江は何を学び取ったのだろうか。

第1節 幼児保育

興望館ですでに始まっていた保育事業への関心から、吉見は、グリニッチハウスの保育所について、「子供達の教育的指導に重点をおき、余り多数の子供を預る事はしないが、コロンビア大学師範科の指導下にあつて、家庭と密接な連絡を保ちつゝ、母の教育にも留意して子供の保育を行っているのである」(吉見1938:207)と記している。25周年パンフレットには、2歳から4歳を対象に日中保育で生活習慣が身につくように指導がなされていることが、エプロンをかけて大きな盥で手を洗う幼児、午睡をする幼児の写真を添えて記されている (Greenwich House, n.d.)。また、「適切で温かな食事の後で、きもちのよいお昼寝に向かう」と説明書きを付けて、満腹して眠そうな目をした午睡前の幼児たちの写真が掲載されている。どの子どもも首からナプキンをかけて食卓についており、食卓にはクロスが掛けられ、ガラスのコップに水が、また花を生けた小瓶が中央に置かれている (Greenwich House, n.d.)。吉見が「栄養のある温い食事が皆の為に用意されて、楽しくお昼を頂くのである」(吉見1947:207)と表現する「楽しい」雰囲気、テーブルクロスや花やグラスが説明している。吉見が着任した時点で興望館の幼稚園では給食を行っていなかったが、吉見は、1930年12月に味噌汁を提供することから給食に着手した。(瀬川2000:92-93)。

第2節 救療事業

グリニッチハウスでは、医師と看護師による身体計測・健康診断の他、栄養給食、食事例の展示、相談の糸口やアフターケアとしての家庭訪問、さらに、暑苦しい大都会を離れての夏季キャンプも保健活動として位置付けられていた。吉見はグリニッチハウスについて「特に必要な子供の為には、気候の好い田舎を選び、健康増進、生活訓練の目的を持ち優れた指導者によって、キャンプ生活を営む事もある」(吉見1947:208)と記述している⁽¹⁵⁾。「ニューヨークの夏の暑さから一時的に逃れるために、隣人たち、とくに子どもたちには、グリニッチハウスのなかまたちと田舎に移ること

は決して贅沢ではなく、街での生活の必需品とみなされます」(Greenwich House, n.d.)とシンホヴィッチは述べている。グリニッチハウスに限らないセツルメントの例として、家庭の経済的事情への対応として貯金事業を「少年はキャンプに行く旅費」のために行っている例が紹介されている(大阪市社会部1936:30)ことから、キャンプが救療事業の一環として位置付けられていることがわかる。

第3節 学齡児童指導

吉見は、グリニッチハウスの例として、「自分がヴァイオリンを習いたいと思っても買えない、日本ではお金持の子供はお稽古が出来ますけれども、アメリカではそういうことのないように下町の移民などの子供でも、セツルメントみたいなものがありまして、ヴァイオリンなんか一度にお金が払えなければ何辺にでも払って終いに自分のものになり習いたいものを習う」姿(周郷・吉見・坪田1949)を紹介している。

グリニッチハウスが備える「毎日学校の余暇を楽しく過す事の出来る色々なクラスやクラブや図書室」について、吉見は、「このセツルメントは、近辺に幾軒かの工作所を有し、趣味の豊かな彫刻、木工、陶器の指導所に充てて居る」こと、とくに「画描きや、小説家や詩人が好んで住」むという地域の特色が生かされて「各工作室ではその道の先生が子供達に熱心な指導を与へ弟子としての補導を行ふ」と紹介する(吉見1947:207-208)。25周年のパンフレットによれば、他に劇あそび、絵画の活動もある。シンホヴィッチの自伝には「就学前にナーサリーや幼稚園で、医師と看護婦の健康診断を受け、昼食をとり、屋上のあそび場で過ごし、リズムあそびを楽しみ、心身ともに健康に過ごした子どもたちが、学校に行くようになると、放課後クラスにやってきて、体操室を使ったり、描画活動、絵画、映画、子供新聞製作を通した作文、調理などの家事や、ほかにも子どもがやりたがって親が認めたことなら何でもに取組む」(Simkhovitch, 1938: 271)と、託児からクラブまで、親子ぐるみで長期にわたってセツルメントと関わりながら子どもが育っていく様子が示される⁽¹⁷⁾。

第4節 セツルメント経営

「グリニッチハウスの如きも私設のもので、一人の夫_{ママ}人と、之を扶ける家族の人々、友人達の二三十年間に亘って注がれた、真に倦まざる愛の努力と信念に依て育てられ、次第々に咲き、実って来たものに他ならない」(吉見1947:209)と、セツルメント運営の様子を吉見は記している。グリニッチハウスは興望館と同じ私立事業である。館長は女性で、館長を「扶ける」家族や友人の存在があり、そうした、いわばプライベートな人間関係の上にセツルメント事業が成り立っていた。当時の吉見には養うべき家族がおり、帰国後に自らが興望館でセツルメント事業に従事しながらどう生活を立てていくかは課題の一つであったと考えられる。館長がグリニッチハウスの仕事に留まらず、行政の求めに応じ種々の委員会に名を連ね、母校で非常勤講師として教鞭もとり学生を受け

入れて実習させている姿はロールモデルとなっただろう。

「楽しい家族の如く日常生活の苦楽を分かち合ひ、皆各々の特技を以てその持場々々に力を貸し働いていた」と吉見が表現する館の中で、「食事は皆が一緒に賑やかな談笑の中になされるのであった」（吉見1947：209）という生活を吉見は体験した。25周年パンフレットには居住者の食事風景の写真が掲載されている（Greenwich House, n.d.）。銘々に主菜皿とパン皿、水のグラスが並んだ食卓を男女18名が囲んでいる写真である。

終章 おわりに―「希望の扉」としての施設を

間接的な資料による検討ではあるが、吉見静江が興望館から派遣されて赴いたアメリカ留学の2年間についてその実態を考える素材が得られた。

吉見自身が振り返っている文章からも、興望館の運営におけるグリニッチハウスの影響は仮説となり得る。まだ整理されていないが、グリニッチハウスと興望館の事業には類似性も見受けられる。今後の継続的検討が求められる。

コロンビア大学同窓会研究叢書における吉見の筆は、淡々としてアメリカの社会事業を解説するが、中で「日本人が一般に考へる様な社会事業は惨めなもの、救護を受ける者は勿論、社会事業を為す人々も貧相で如何にも生活に疲れ切った様なのが当然であり、又それを奇特とすると云ふ風な」偏見に対して、「馬鹿らしい考へ方」と総括している箇所がある（吉見1947：188）⁽¹⁵⁾。片やグリニッチハウスを表現するのには、「楽しい家族の如く」「苦楽を分かち合ひ」「特技を以て」「食事は皆が一緒に」「賑やかな談笑」「優れた技術と誠意ある奉仕」という言葉を並べている。グリニッチハウスとの出会いで、ソーシャルワークは惨めでも貧相でもなく、明るく楽しく、健康な喜びと楽しみに満ちたものだという認識を吉見は獲得したとみられる。

1947年末、吉見が興望館を退職して課長を任じた厚生省児童局保育課は、「保育所に関する事項」等の他に「児童厚生施設に関する事項」「児童文化に関する事項」を所轄した⁽¹⁷⁾。そして、この児童厚生施設こそ、社会の共通理解を図ることから行政の取り組みが始まった全くの新規領域であった。児童厚生施設を説明して、吉見は「従来我国に於てもセトルメントには児童のための働きがあって、少年少女クラブ、児童読書室、児童遊園等が開かれていた」と興望館のような例を挙げた後で、「音楽、絵などの教室を設けて専門家の指導によってほんとうに芸術的な味わいのあるものを養う機会を与えているところもある、ニューヨークのグリニッチハウス・セトルメントの音楽教室はさかんなもので」とグリニッチハウスを例示し、「子供達は思い思いの好みによってバイオリンを習うもの、歌を習うもの等、それぞれ得意の選択をすることができる」（吉見1948：41）と活動の本質に触れている。

なぜ、「子供達は思い思いの好みによってそれぞれ得意の選択を」して活動することが必要なのか。

この点については、「子供の技術がのびるのではなく精神がのびるんですからね」（周郷・吉見・坪田1949：21）という一言に収斂される。周郷博らとの鼎談でグリニッチハウスを引き合いに出した後、施設運営のことを周郷から質問され、吉見は「社会施設なんです。ですから児童福祉法に児童厚生施設というのがあるのですが、こういうものをやったらよいのではないかと思うんです。読みたいものが読め習いたいものが習えるんだということになると子供は希望を与えられるんです」と述べている。（吉見1949：17）吉見が語る児童厚生施設の実態は、当時の日本にはなかった。グリニッチハウスが、戦後の吉見による保育所と児童厚生施設に関わる厚生省児童局の仕事の中で姿を現すのかどうかを検証することが次の課題である。

謝辞

この研究は、社会福祉法人興望館および社会福祉法人茅ヶ崎学園に資料閲覧の便宜を図っていただいたことにより成立している。ここに記して心からの感謝を表します。

また本稿は、科学研究費（基盤研究C）「第2次世界大戦後の日本社会における保育所保育の確立に関する研究」（課題番号：18K02163）の助成を受けて行った研究の一部である。

註

- (1) 2017年度には、科学研究費（基盤研究C）「近現代日本社会における保育の公的責任性に関する史的研究」（課題番号：25380766 2013年度～2017年度）の助成を受けていた。2018年度からは、科学研究費（基盤研究C）「第2次世界大戦後の日本社会における保育所保育の確立に関する研究」（課題番号：18K02163）の助成を受けている。
- (2) 吉見静江の留学は、興望館の運営母体から「将来静江が興望館業務主任となるために、米国の大学で社会事業を研究することが適当であり、そのために興望館として静江を米国の大学に派遣するとの方針を決定した」（瀬川2001：33）ことによるものであったと伝えられている。
- (3) 興望館資料室に該当する資料はない。また、吉見静江が厚生省を退官した後に虚弱児施設「茅ヶ崎学園」を新設し施設長となったことから、後身の社会福祉法人茅ヶ崎学園 児童養護施設「サーフサイドセヴン茅ヶ崎ファーム」理事長／キャプテン 吉見哲先生のご厚意で、「サーフサイドセヴン茅ヶ崎ファーム」にて吉見静江初代園長が残された海外旅行用鞆と資料を閲覧させていただいたが、該当する資料はなかった。ただし、「サーフサイドセヴン茅ヶ崎ファーム」で閲覧および撮影をご許可いただいた写真資料の中には、若い日の吉見静江先生が写り込んでいる、場所／撮影時期不明のものが幾葉もある。今後の解明が待たれる。
- (4) 本書は、1950年に『これがアメリカ』とタイトルのみ変更してジープ社から再刊されている。前刊時の脱字を修正した跡が確認された他は全く同一の内容とページ構成である。前刊が学術書の体裁であることに比して、後刊されたものは表紙に挿絵が入り小型化し、一般向けの啓蒙書として刊行されたとみられる。
- (5) グリニッチハウスは、今日も同じ場所でセツルメント事業を継続している。www.greenwichhouse.org；最終閲覧20210624
- (6) この刊行物の閲覧については、聖学院大学総合図書館に大変お世話になった。ここに記して感謝いたします。

- (7) 原本刊行の翌年に発行されていることから、大阪市社会部のこの領域への関心の高さが伺われる。大阪 YMCA（大阪基督教青年会）出身のセツルメント運動家としてよく知られた志賀志那人（1892-1938）が、日本ではじめての公立セツルメントである大阪市立市民館の館長を経て、大阪市社会部長に就任したのが1935年である。「はしがき」に署名も付記もないが、志賀が関わった仕事とみてよいだらう。抄訳の対象となったのは第1章と第14章であり、それぞれ「Inventory」を「概要」、 「Organization and Administration」を「組織と運営」ではなく「組織及び行政」と訳出している。
- (8) 興望館資料室所蔵
- (9) Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 21 これら実践演習の項目は「1930年代にはすでに一部は消滅していた」（Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. 2001: 22）というが、カリキュラム改訂の詳細は不明である。
- (10) コロンビア大学は、メアリ・キングスベリ・シンコホヴィッチの母校の一つであり、メアリ自身が1907年から1915年にかけてコロンビア大学内のいくつかのカレッジで教鞭をとってもいた。その中には、吉見が留学した先のニューヨーク社会事業学校での1912年から1915年の非常勤講師経験も含まれる。； VCU Libreries Social Welfare History Project ; <https://socialwelfare.library.vcu.edu> 最終閲覧 20210620
- (11) マネジメントが主任の役割であるという見解は、保育、保健、医療の資格を持たない吉見のあり様に重なる。
- (12) グリニッチハウスでも、音楽教室を始め、陶芸、劇活動等、幼い子ども、学童、青年、大人とクラブ活動が盛んであった。
- (13) <http://www.anb.org/> 最終閲覧 20210620
- (14) Phi Beta Kappa：アメリカの大学で成績優秀者が入会できる終身制の友愛会
- (15) VCU Libreries Social Welfare History Project ; <https://socialwelfare.library.vcu.edu> 最終閲覧 20210620
- (16) 興望館は、グリニッチハウスと同様にキャンプ開催に積極的であった。吉見が着任した翌夏には、保育園で一日キャンプを実施している。詳しくは、「昨秋より一年間の大きな出来事」パンフレット（年月日未詳 興望館資料室所蔵資料）を参照されたい。
- (17) 興望館に学齡児指導事業が現れるのは、吉見が着任した直後の少年少女部であった。日曜学校、体格検査を行うヘルスデー、「毎日の学校の予習復習」のおさらひ会、英語会、「毎日のお小使_{ママ}ひを貯金する」子供郵便局、「雀の学校」という童謡童話の会、「日曜の朝早く郊外に心もからだものんびりとやすませる会」である九銭旅行、「小羊会」と名付けられた「童謡童話の会又テンラン会などを学期のかはり目にするお集り」、他に「うた・ダンス・手芸・園芸・かるた会・劇の会・積木・ピンポン・ピクニック・映画会など」を広報した記録が残っている。詳しくは、「子供新聞 No. 8」（1932.1.31 うす茶色スクラップ所収；興望館資料室所蔵資料）を参照されたい。
- (18) この激しさは吉見には珍しい。「興望館理事会記録」（興望館資料室所蔵）によれば、吉見の厚生省入省は1947年12月、正式な打診があったのは同年10月という。この論稿は、丁度その時期に書かれている。吉見は何に腹を立てていたのだろうか。
- (19) 「厚生省分課規程中改正（抄）昭和22年12月22日」児童福祉法研究会編『児童福祉法成立資料集成 上巻』所収 1978 ドメス出版666

引用文献

- Feldman, R. A. and Kamerman, S. B. ed. (2001) *The Columbia University School of Social Work*.
Columbia University Press
Greenwich House (n.d.) *TWENTY-FIVE YEARS OF GREENWICH HOUSE*.

- 興望館創立75周年記念誌編集委員会編（1995）『興望館セツルメント七五年の歴史』社会福祉法人興望館
- 大阪市社会部（1936）『紐育に於けるセツルメント』大阪市社会部庶務課
- 瀬川和雄（2000）『興望館セツルメントと吉見静江 その実践活動と時代背景』社会福祉法人興望館
- 瀬川和雄（2001）『吉見静江 シリーズ福祉に生きる』大空社
- 瀬川和雄（2004）「婦人宣教師達と興望館」, 瀬川和雄編『戦前期児童保護関係資料』（『北米・カナダ諸教会派遣 婦人宣教師達の足跡』付）所収, 社会福祉法人興望館
- 瀬川和雄編（2007）『激動のなかで 混乱期に於ける日本人理事による理事会記録 昭和16年4月～昭和27年3月』社会福祉法人興望館
- Simkhovitch, M. K., (1938) Neighborhood; my Story of Greenwich House. W. W. Norton & Company
- Simon, B. L., (2001) Settlement Houses.; Ronald A. Feldman and Sheila B. Kamerman ed. The Columbia University School of Social Work. Columbia University Press
- 周郷博 吉見静江 坪田譲治（1949.5）「鼎談 子供の幸福とは」18-22『厚生時報』
- 鈴木みな子（2003）「社会福祉法人の歴史展開とミッションー社会福祉法人の経営に関する一考察ー」日本社会事業大学大学院平成14年度修士論文
- 塚本しう子（1983）「吉見静江」五味百合子編『社会事業に生きた女性たち その生涯としごと』所収 ドメス出版
- 吉見静江（1947）「アメリカの社会事業」, 財団法人コロンビア大学同窓会編『アメリカ研究叢書 社会』所収 産業図書
- 吉見静江（1948）「保育所と児童厚生施設」33-48, 山高しげり編『こどものしあわせ』清水書房
- 吉見静江（1949）「レクリエーションとグループワーク」7-20 垣内芳子編『こどもとレクリエーション』社会教育連合会

A Historical Analysis of the Theory and Practice of the Settlement House in New York in the 1920s and Sizue Yoshimi: “With, Not For”

Kaoru TAZAWA

Abstract

Sizue Yoshimi was the first head of the nursery section of the Ministry of Health and Welfare. She led the Kobokan Settlement House before the arrival of the Ministry of Health and Welfare. She attended the New York social work school before taking on the Kobokan Settlement House. It has been said that she spent a few days at Greenwich House, New York. This study aims to clarify what Yoshimi experienced and learned during her studies abroad. We understood there was a relationship between the New York social work school and Greenwich House and could presume what kind of experience she had there. Through studying abroad, Yoshimi espoused the kind of social welfare expressed by “With, Not For.”

Key words: Sizue Yoshimi, Kobokan Settlement House, Greenwich House, nursery school, Child Welfare Law